

言語教育から民主的シティズン シップ教育へ

— 『10代からの批判的思考』 を
書いたわけ —

2020.12.8 第6回zoom寺子屋

名嶋義直（琉球大学）

お話の流れ

語り手の背景

日本の現状と
未来

[複言語主義] と [複数性]

[市民] と
[市民性]

ドイツの [政治
教育] / [民主的
シティズンシップ
教育]

ドイツの学校の
授業の様子

「わたしたち」との関連

わたしの実践

質疑応答や対
話 (時間があれば)

語り手の研究者・教育者としての変遷

現代日本語文法研究

語用論研究

日本語教育（大学院での教員養成）

東日本大震災・福島第一原発事故を契機に、

「社会」や「市民」について主体的に考え始める。

批判的談話研究（Critical Discourse Studies）

民主的シティズンシップ教育（Education for Democratic Citizenship）

日本語教育（現在は上級と副専攻の共修授業）



「市民」 になるこ ろの話

- 研究者，教育者としてのアイデンティティを見失い，災害ボランティア，復興支援ボランティアをしながら，アイデンティティを回復するまでの個人史

今後の日本社会：多様性の高まり

今よりも外国人が増える。

今よりも他者と「共に生きる」必要性が高まる。

さらなる搾取や排他主義の台頭が懸念される。

搾取・排他的扱いへの反発も懸念される。

→社会の分断がより深刻化する。

→多様性に寛容な社会の実現が危うくなる。

→参考モデル：欧州評議会の採る複言語主義

「複言語」とは:西山（2011）を参考に

● 「わたし」個人が複数の言語を使える状態

(1) 能力としての複言語

日本語でできること、韓国語でできること、英語でできること、言語別技能別に違ってよい。

(2) 価値としての複言語

言語は「わたし」のアイデンティティ。自分の中に複数のアイデンティティ。それぞれ等価値。

● 「わたし」の中が多様な状態。複数の「異なるわたし」を受け入れて調整している状態

「多」言語（文化） / 「複」言語（文化）

「多」：社会全体というマクロな視点

「複」：個人の中というミクロな視点

「多」言語（文化）イコール「複」言語（文化）とはならない。個々人は「単」言語（文化）の場合。

個人は「複」言語（文化）でも国家の言語政策で社会は「単」言語（文化）ということもありえる。

「単」言語（文化）国家でも、一定程度で黙認したり無関心・無関与という態度をとったりすれば、「多」言語（文化）社会もありうる（日本はどうでしょうか？）。

複数性の担保された社会

自分とは異なる
他者や考えを、

寛容に受け止め、

排除したり、攻撃
したり、教化した
り、同化を強制し
たりしない社会

他者に無関心でも
なく、他者を放置
するでもなく、

同じコミュニティ
を「ともに生き
る」社会

それぞれの人にそ
れぞれの「居場
所」がある社会

多様性と全体のゆるやかな結束性とが
両立する社会

社会の複言語性を推し進めると

多様な「わたし」、多様な「他者」が増えていく。

「わたしとは異なる人」が増えていく。

社会がばらばらになる？「ばらばらな人」からなる「まとまりのある社会」は成立するのか。

「共に生きる人」がまとまるために何が必要か。

- 1つの国家, 1つの民族,
1つの言語, 1つの文化,
1つのイデオロギー,
1つの国民, 1つの社会,
「みな同じ」という発想。

または,

- 異なることに意味を見出し,
異なるものが複数集まっ
ている社会で, 自分はその
異なるひとりであることに
価値を見出すという, 一種
の逆転的発想。

ばらばらな
私たちを束
ねる2つの
方法

- 国家や国籍という枠組みを超越した社会（コミュニティ）が実現し存在している今，「[社会＝国家]」という考え方は実態に合わない。
- 「国家＝国民＝国籍＝アイデンティティ＝民族＝言語」は幻想。（福島2011も参照）
- 社会に属する人は皆「[市民＝共に生きる人]」という利害関係者。
- ここでは「[市民]」に求められる素養を「[市民性]」と呼ぶ。
- 具体的な「[市民性]」：自分たちが属する社会を，自分たちで考え，一緒に作っていくという考え方，それを実践するための知識や手法，実践する力といった素養。

[市民]

と

[市民性]

可能な限り「排除」より「包摂」を

自分たちとは異なるものを排除していけば、最後は排除する対象がなくなり、単一性が強くなる。

単一性の強い社会は全体主義的社会に接近していく。

少数の人たち、自分とは異なる他者を包摂すればするほど、多様性や複数性、自分の唯一性が高まる。

「自分たちとは異なる他者」をどうやって包摂しあうか。

「互いが一瞬でも関わり合う」ことができる「場」が必要。

仲間内だけではなく他者とこそ「対話」

拒否や排除は「共に生きる」可能性を潰す。

「対話」なしに正論を迫るのは全体主義的。

民主的な方法でこちらを向いてもこちらには「対話」しかない。「対話のための対話」から。

AかBかといった二元論的な議論も排他的。

Aという選択はBを拒否排除する（逆もまた真）

aとbとが「共に存在する」可能性を探れないか。

そのためには「対話」による「調整」が必要。

「価値としての複言語」と「能力としての複言語」

（言語教育の持つ潜在力がここにもある）

「対話」の土壌をつくり，育てていくためにどうすればいいか

民主主義の理念を理解し尊重し実践する「市民」，「市民性」を育てていくことが大切。

「複数性」の理念を確認し続けること。

理念を実践する行動をとり続けること。

民主主義はしんどくて維持するのが大変なもの。

手を抜くとすぐに廃れてしまうもの。

諦めずにしぶとく理念を確認し，実践を継続し，次世代に引き継いでいくことが重要。

民主主義の実践はどこでもできる

家庭で

学校で

地域で

職場で

→どこでも実践できるけど、そういうのに慣れていない。

→「市民」になるための教育（市民性教育）が必要。

→ [市民] が集い関わり合う [機会] や [仕掛け] を設け、包摂を後押し（エンパワメント）することも必要

ドイツの「政治教育」が参考に

「市民」として地域に主体的に関わり、

自分たちで自分たちの社会を、

「民主的な方法」で作り、動かしていく素養、

それを育ていくのが「政治教育」で、

ドイツの学校教育の根幹とも言えるもの。

特に第二次大戦後は「歴史への反省」から、他者と「共に生きていく」素養を重視。

欧州の統一後、改めてその意義が再確認、再評価されている一方で、右翼ポピュリズムの台頭にも直面し、その存在意義が問われてもいる。

民主的シティズンシップ教育 (EDC)

ドイツの教育の核は政治教育（近藤2009: 15）

その「政治教育」という理念は、「民主的シティズンシップ教育」と英訳される。

民主的シティズンシップ（Education for Democratic Citizenship）：「あるコミュニティの中で共に生きる人」が持つ特性

多様性を寛容に受け入れ、民主的な姿勢・態度・方法で、社会と主体的に関わりながら「とも生きていく」モデルとなるもの。

- 主権者教育はその国家にとっての「主権者」を育てる教育。「よき国民」を作る教育。
- 全体主義国家や強権独裁国家であっても、そこに「主権者教育」は成り立つ。
- 一方、全体主義国家や強権独裁国家のような非民主的的国家においては「民主的シティズンシップ教育」は成立しえないはず。
- 日本において、主権者は日本国籍を持つ人。日本国籍ではない人は法律的に主権者ではない。
- [市民] と [主権者] は同じではない。

「民主的シティズンシップ教育」と「主権者教育」とは同じではない

。他者とのコミュニケーション
ンや議論・対話において多
様性の受容・尊重と言語運
用が不可欠であることから、
日本語教育においても、複
言語主義に立った言語教育
が重要であり、それが民主
的シティズンシップ教育、
文化間教育（特に批判的文
化アウェアネス）や批判的
談話分析の実践を通して、
社会的な結束性を高め、民
主主義社会の実現につな
がっていくものである。

2015年10月 日本語教育 学会パネル

。教育を通して学習者が達成する「気づき・受け入れ・議論・対話・多様性の尊重」等の基盤には、批判的言語アウェアネス、批判的文化アウェアネス、批判的談話分析等に共通する「批判的なものの見方」がある。日本語教育が複言語主義に立った言語教育を行うためには教師にも批判的リテラシーが求められる。

名嶋義直・野呂香代子・三輪聖（2015）

「これからの日本語教育は何を目指すか
ー 民主的シティズンシップ教育の実践
ー」, 『2015年度日本語教育学会秋季大会
予稿集』 pp. 37-48. 沖縄国際大学,
2015. 10. 10

ここまでで共有した前提

能力としてのの、
価値としてのの、
複言語主義

民主的シティズ
ンシップ教育

日本語教育で
EDCを。日本語教育をEDC
に。

言語教育が持つ
可能性。

ことば「だけ」
の教育から「共
に生きる」〔市
民〕の教育へ。

教師も支援者も
学ぶ人も支援を
受ける人も、
〔みんなの意識
変革〕が必要。

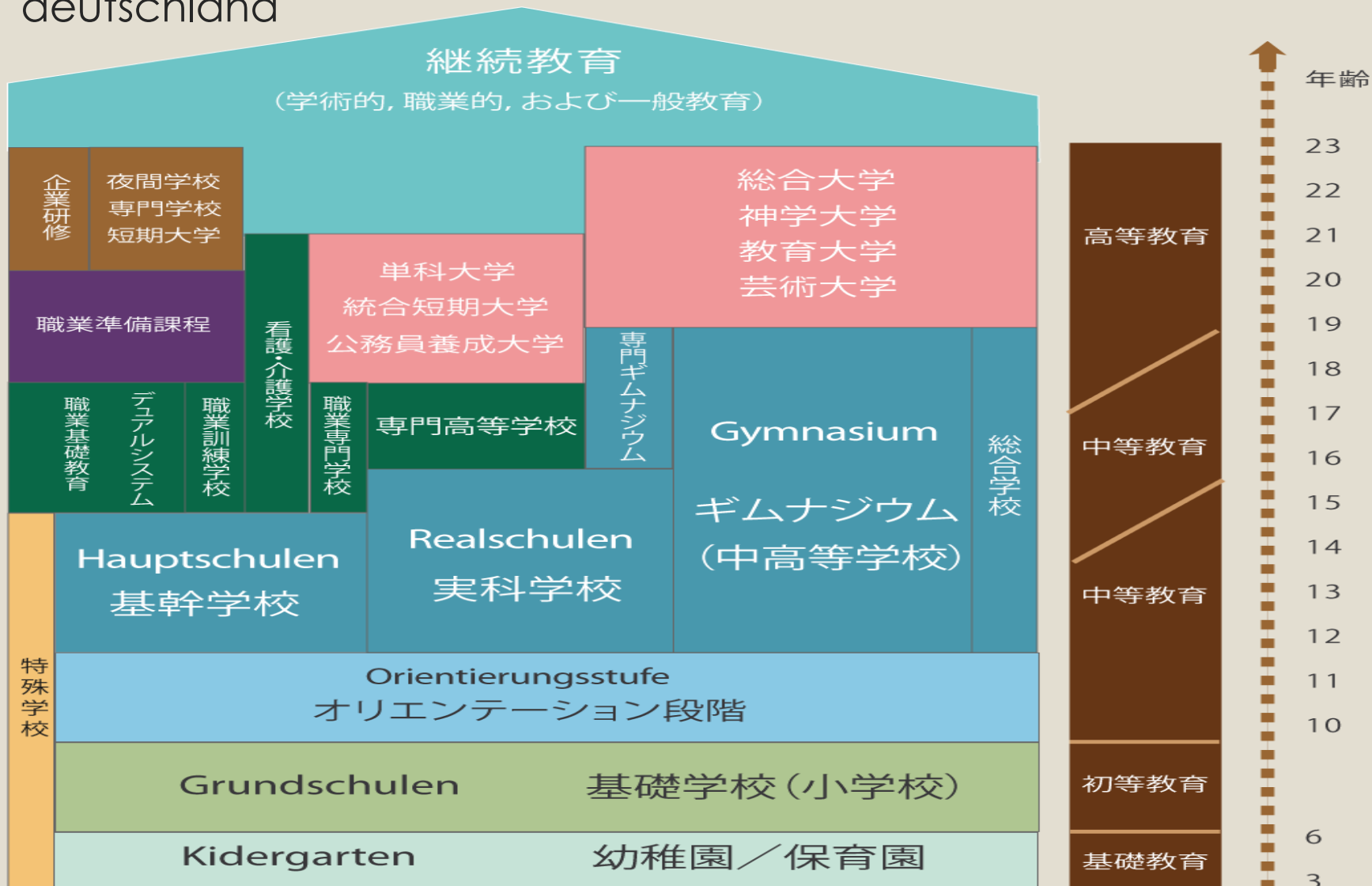
ドイツでの見学先



- Carolus - Magnus - Gymnasium (ギムナジウム@アーヘン)

ドイツの学校制度

<http://euro-japan.net/index.php/jp/bildung/bildungssystem-deutschland>



(1) 圧倒の禁止

生徒を期待される見解をもって圧倒し、自らの判断の獲得を妨げることがあってはならない。

(2) 論争のある問題は論争のあるものとして扱う

学問と政治において議論のあることは、授業においても議論のあるものとして扱わなければならない。

(3) 個々の生徒の利害関心の重視

生徒は、政治的状況と自らの利害関係を分析し、自らの利害関心にもとづいて所与の政治的状況に影響を与える手段と方法を追求できるようにしなければならない。

ボイテルス バッハ・コ ンセンサス

(der Beutelsbacher
Konsens)

[近藤(2009) 参照]

見学先の事例から考えたいこと

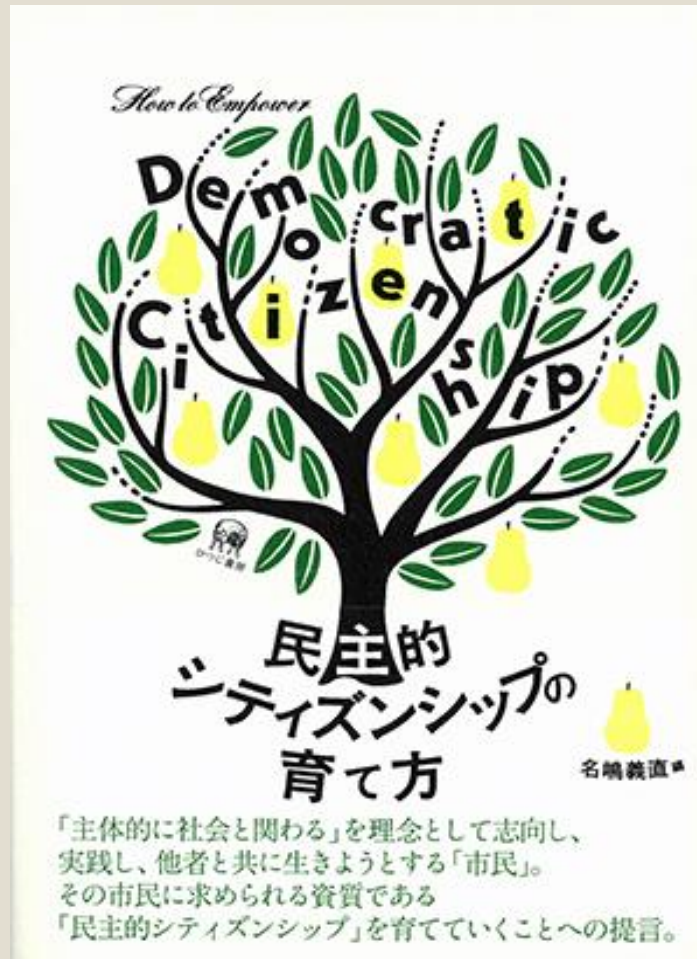
民主主義教育（政治教育，民主的シティズンシップ教育）はどのように実践されているか

授業における教師（＝市民）の関わり方

学校（＝社会）における子どもたち（市民）の役割

子どもたち（＝市民）のどんな力をどのようにして育もうとしているか

理念と実態を紹介する



アーヘンのギムナジウム見学

- 「政治」の授業
- ホームルーム
- 生徒会
- 教師／生徒との懇談

* 学校見学の様子は拙編著で詳しく述べています。



「政治」の授業

- 6年生の「政治」科目を見学
- 一般的な教室のレイアウト
- 前に黒板（観音開き）,
- その前に司会（男女2名）・書記・板書の係。チェック係の有無不明。
- 教師は黒板横の机に腰かける。



扱われていたテーマ

- テーマ：難民の子どもを通常クラスで受け入れるか、難民の子供だけの特別クラスで受け入れるか。
 - ➡ テーマは事前に生徒たちが設定。現状は後者（特別クラス）
- 移民・難民向けの特別クラスの有無は州によって異なる。1週間に1回ぐらいの頻度で通常クラスに合流することになっているが、なかなか友達ができないなど双方の子どもたちにとって色々な問題があるよう。

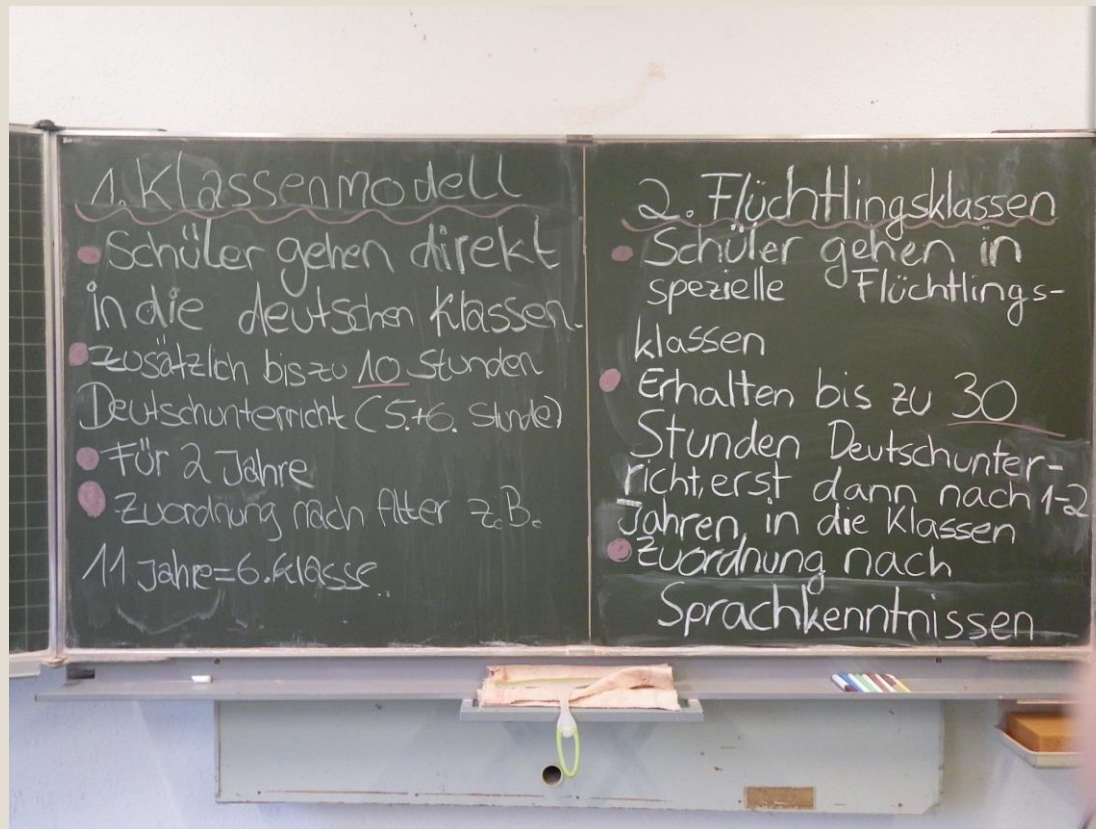
授業の導入部分



2つの授業の説明



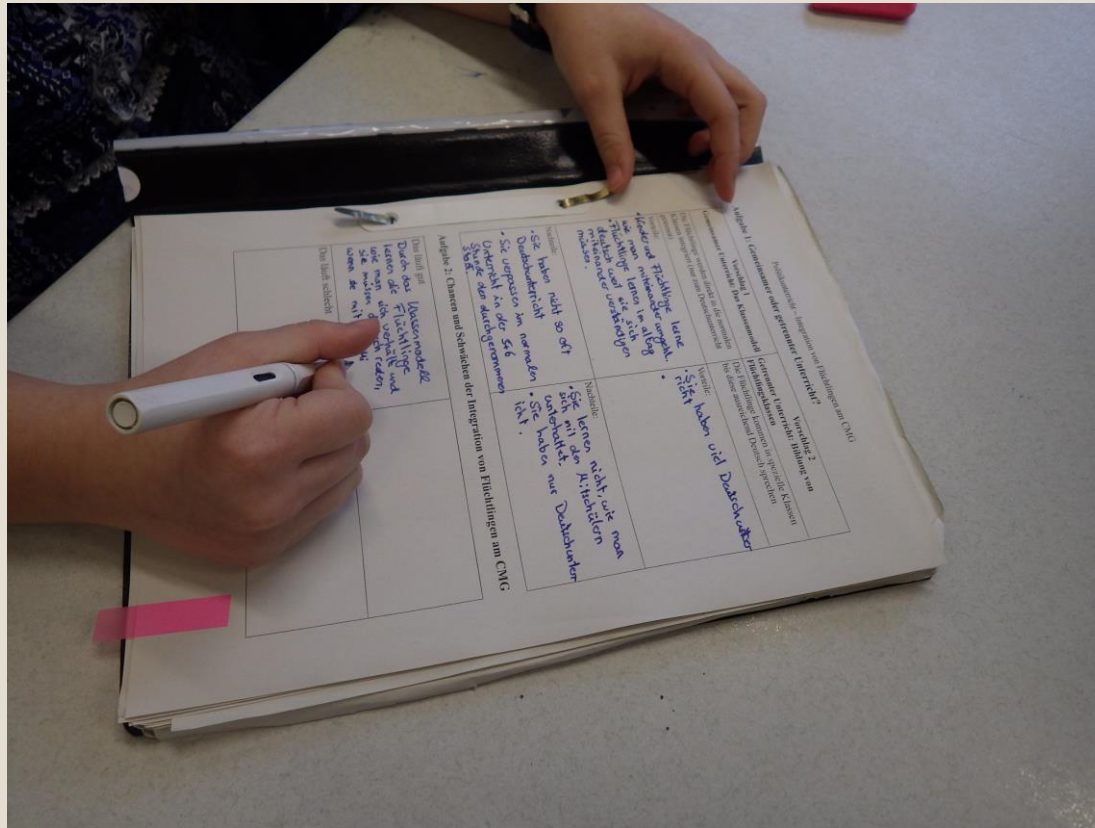
2つの授業の説明（板書）



その場でディベート



ディベートを参考に自分の考えを



どちらの制度がいいか投票



難民の生徒が自分の意見を語る



決めた後も，よりよい形を目指して
さらに議論



生徒への質問とその答え

Q：自分と他の人と意見が違う時に
気をつけていることは？

A：複数生徒の回答

- ・ 個人的な攻撃をしない。
- ・ テーマについて議論する。
- ・ 相手を悪く位置づけない。
- ・ 相手の立場を尊重する。
- ・ 意見は違っても過半数で決まるから違う意見があってもいい。
- ・ 大きい声を上げない。
- ・ 相手の意見を聞き、自分の意見も言う。分かり合うための議論をする。



ベルリンの学校の「政治」科目教員とのQ&A

Q：ホームルーム授業の本当の目的は何か。決めることを通して何を学ぶのか。

A：これは民主主義の教育。会議や議論の経験，調整に必要な知識や方法を体験する。失敗や衝突を経験し，どう調整するかを学ぶことが非常に大切だと考えている。



学校での政治教育の問題点

- (1) 教師の多様性：理解がなかったり非協力的だったり。「トップダウンで決めれば早いのに」というようなことを言う先生もいる。
- (2) 生徒の多様性：たとえば難民の高学年生の中には価値観や理念に違いがある人がいる（男性優位的な考え方など）
- (3) 時間がかかること：小学生だとまだ自分で決めることが難しい年齢であるため、自分の意見を形成させ、発言させるまでのプロセスも必要になってくる。忍耐が必要。
- (4) 評価の難しさ。



「政治教育」の教育効果

生徒たちが授業で議論したことは、必要に応じて自分たちの学校のシステムに反映され、合議と評決を経て学校のルールとして実現されていく（または却下される）という仕組み。

生徒たちは、自分たちで課題を見出し、異なる意見との建設的な調整を経て、物事を決定し、失敗や挫折をしつつ解決法を探り、自分たちの社会（=学校）をよりよいものに変えていく。

学校や教室は1つのリアルな社会。そこでリアルな民主主義の経験を積み重ねていく。

- 共同決定という民主的プロセスへの参加
 - 自分で考え計画する
 - 対話、ディスカッション（民主的な方法）を重ねる
 - 責任を持って関わる
 - 知識，手法，自分と他者との関係調整，そして行動することを学ぶ
- ➡ 政治的活動に求められる
[市民] の素養を学ぶ

民主主義を 学ぶとは？

今後の日本社会

社会には外国人問題が山積。生活者も増える。

→今よりも他者と「共に生きる」必要性が高まる。

→私たちの問題。「おまかせ民主主義」から脱却。

社会の分断や排他主義の台頭が懸念される。

→多様性に寛容な社会が実現できるか。

→[市民]が主体的に取り組む課題

1つのモデルとしての 民主的シティズンシップ教育

ドイツと日本とでは
具体的な状況は異なるが、「民主主義」という普遍的な価値観は共有できるのではないか。

ドイツの政治教育
(民主的シティズン
シップ教育)から学
ぶものは多い。

そのまま真似するの
ではなく、「自分た
ちの社会」にローカ
ライズすることが重
要。

日常生活で、学校の
授業で、「社会」に
ついて、普通に対話
し議論する土壌づく
りが必要。

なぜ国内の日本語教育で「民主的シティズンシップ教育」を実践するのか

(1) 外国にルーツを持つ人も「市民」(=同じ社会で共に生きる人)

→どうしても弱者側になる。主体的に生きるために民主的シティズンシップを身につけた方がよい。

(2) 民主的シティズンシップを持った人が増えることが周囲に影響し、それが社会の変化を促す。

→複言語社会, 多言語社会, 異文化間理解が進む。

(3) 日本語教育での実践が「市民」を育て、その「市民」が、日本社会をよりよい形に変えていく力になる。

なぜ海外の日本語教育で「民主的シティズンシップ教育」を実践するのか

(1) 複言語主義教育として：使える言語が増える（能力としての複言語）

(2) 複言語主義教育として：日本語を学ぶことで新しいアイデンティティを獲得する（価値としての複言語）

(3) 民主的シティズンシップを持った人が増えることが周囲に影響し、それが社会の変化を促す。

→多様性への寛容さが高まる。複言語社会，多言語社会，異文化間理解が進む。

(4) 日本語教育での実践が「市民」を育て、その「市民」が、社会をよりよい形に変えていく力になる。

日本人への「民主的シティズンシップ教育」も必要

(1) 外国にルーツを持つ人と同じ社会で共に生きる日本人も多数派 [市民]

→ 主体的に生きるために民主的シティズンシップを身につけた方がよい。

(2) 多数派の中に民主的シティズンシップを持った人が増えることが社会の変化を促す。

→ 複言語社会, 多言語社会, 異文化間理解が進む。

(3) たとえば地域支援での実践は多様な人が集い関わる「複数性を持つ場」→ [市民]として主体的に社会と関わる練習や経験の「場」→ [市民]を育てる「場」 [市民]が育つ「場」が必要。

- 日本語教育の実践を，「民主的シティズンシップ教育」として再定義することで，その活動は，日本社会をよりよい形に変えていく潜在力を持つことになる。
- それは，「ともに生きる場」における「ともに生きる市民」を育てる実践であるがゆえに，学校教育（いわゆる主権者教育や国際理解教育）の歪みや限界を楽々と超えていくことができる。
- 本当の意味での「生きる力」の教育になる。

日本語教育 のポテン シャルは 大きい

- 日本語教育の現場で行って来たこと／行っていること／行っていくことは民主的シティズンシップ教育として捉え直しが可能
- 難しいことにチャレンジしなくても、「対話」を基本とした民主的シティズンシップ教育ができる。
- いろいろな話題を取り上げ「対話」を基本に活動できるのは言語教育の強み

日本語教育
を民主的シ
ティズン
シップ教育
として捉え
直す

(1) 自分の興味・関心・利害から出発する活動⇒現実社会そのものに向き合い考える。

(2) 自分で考えて主体的に学ぶ活動⇒(パウロ・フレイレの言う)「預金型教育」からの転換

(3) 批判的リテラシーを伸ばす活動⇒一歩立ち止まって批判的姿勢で考えること。

(4) 異文化間理解を促進する活動⇒他者や他文化との接触, その受け止め・調整体験

(5) ボイテルスバッハ・コンセンサスを基本軸に据える。

私たちに何が
できるか

私たちは何を
すればいい
か

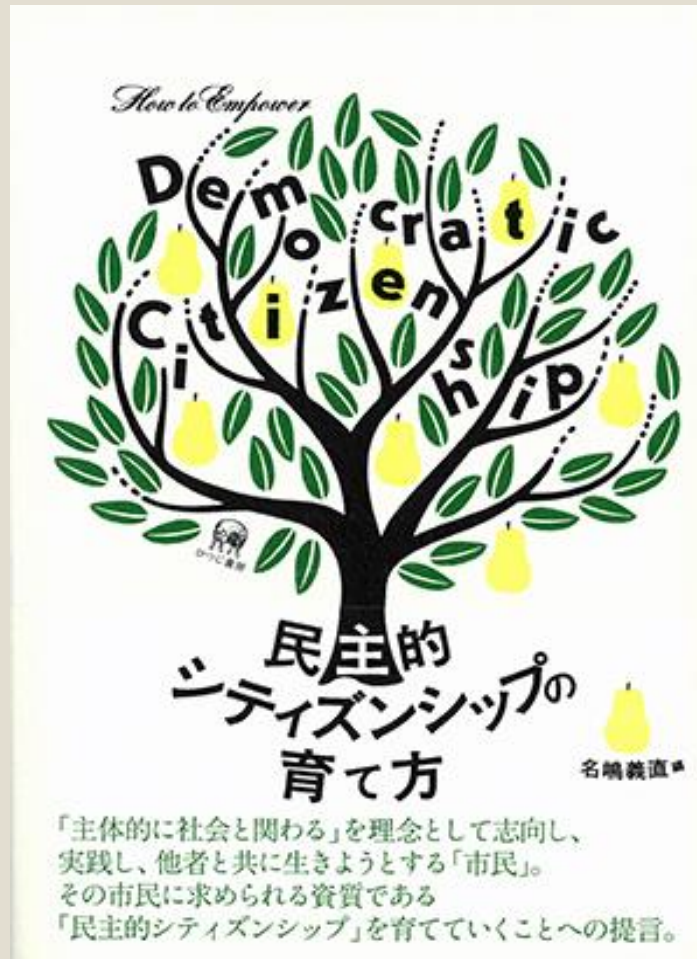
- 民主的シティズンシップの理念を広める。
- 民主的シティズンシップ教育に取り組む。

わたしの
実践

- 言語教育から民主的シティズンシップ教育へ
- 多数派の日本人側が変わらなければ，社会は変わらない。
- 次世代を担う若い人たちへのメッセージが必要。
- 言語教育から外へ

二重の意味で，日本語教育の外へ

理念と実態を紹介する



- 子どもたちが,
- 自分で読みながら,
- 社会のいろいろなことについて考え,
- 自分なりの考えを作り上げていく,
- そういう「おせっかい」がしたかった。

この本を
書いたわけ

- 高校生や大学初年次あたりの読者層（10代から、なので大人も読んでください）
- 読み物として読みながら自分で考える
- 複数のトピック（世界の出来事）
- 興味関心や利害に関わること
- 答えが1つではない問い

民主的シティ
ズンシップ教
育のローカラ
イズ（ボイテ
ルスバツハ・
コンセンサス
を踏まえて）

- 学校, 校則, いじめ
- 進路, 学び直し
- 働く
- 情報を発信する
- 情報を受信する
- 多文化共生
- グローバルに生きる

子どもたち
にとって,
「身近」で
「利害関
心」のある
内容

- 本文中に問いが出てくる。
- 答えが1つではない問い
- 簡単に答えが出ない問い
- 書き込むスペースも作ってある。
- 読み終わっても問いが待っている。

著者と（間
接的に）対
話しながら
、自分で
考える

- 民主的シティズンシップ教育の教材を作成中
- 社会の問題について、「対話」を通して「主体的」「批判的」に考える内容
- 日本人学生にも上級レベルの学習者にも。共修で使うことも。
- 読解を通して学ぶ。読むものはテキストだけではない。
- メディアリテラシーの勉強も。
- 凡人社さんから遅くとも来年度前半には。
- 現在、部分的に試用中

教材の作成・出版（現在進行中）

参考文献_その1

- 近藤孝弘 (2009) 「ドイツにおける若者の政治教育」 『学術の動向』 14-10: pp.10-21. 公益財団法人日本学術協力財団
<https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/14/10/14_10_10_10/_article/-char/ja> (2020.11.29リンク確認)
- 西山教行 (2011) 「講演会記録 外国語教育と複言語主義」,
<https://noriyukinishiyama.com/wp-content/uploads/2019/10/2011_conf_Kanazawa-1.pdf>
(2020.11.29リンク確認)
- 福島青史 (2011) 「「共に生きる」社会のための言語教育 欧州評議会の活動を例として」, 『リテラシーズ』 8, くろしお出版, pp. 1-9.
<<http://www.literacies.9640.jp/dat/litera08-1.pdf>> (2020.11.29リンク確認)
- Starkey, Hugh (2002) “Democratic Citizenship, Language Diversity and Human Rights: Guide for the development of Language Education Policies in Europe, From Linguistic Diversity to Plurilingual Education, Reference Study”. Language Policy Division, Council of Europe : Strasbourg.
<<https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=4&ved=2ahUKEwj5vtno8vDeAhWDa7wKHf7rAjYQFjADegQIBRAC&url=http%3A%2F%2Fciteseerx.ist.psu.edu%2Fviewdoc%2Fdownload%3Fdoi%3D10.1.1.431.871%26rep%3Drep1%26type%3Dpdf&usq=A0vVaw1Q6NlCrY78G9kFHA9bu0K4>> (2020.11.29 リンク確認)

参考文献_その2

- 海老坂武（2020）『100分de名著 サルトル 実存主義とは何か～希望と自由の哲学』 NHK出版.
- J - P・サルトル（著）伊吹 武彦・海老坂武・石崎晴己（訳）（1996）『実存主義とは何か』 人文書院.
- 仲正昌樹（2009）『今こそアーレントを読み直す』 講談社.
- 仲正昌樹（2017）『100分de名著 ハンナ・アレーン 全体主義の起原』 NHK出版.
- ハンナ・アレーン（著）， 大島通義・大島かおり（訳）（2017）『新版 全体主義の起原 1・2・3』 みずず書房.
- パウロ・フレイレ（著）， 三砂ちづる（訳）（2011）『新訳 被抑圧者の教育学』 亜紀書房.

付 記

- ドイツ（ベルリン，アーヘン，ハンブルク）で実施した学校見学と， それに関する今回のご報告は， 「日本社会における民主的シティズンシップ教育の実装と展開」プロジェクトの一環であり， 公益財団法人 京都地域創造基金「言語と未来基金」の助成を受け行われたものです。
- ドイツの授業の様子を撮った写真は当該学校担当者より利用許可を得ています。
- 全国津々浦々を訪ね， 「凡人社サロン」にて民主的シティズンシップ教育の話をしてきました。改めまして凡人社様のご支援・ご協力に記して感謝申し上げます。

最後に

このような内容でよければ、いろいろなところで、お話しさせていただきます。

ワークショップなどできます。

機会がありましたら、お気軽にお声がけください。